東筑組33カ寺の人々と心をつなぐ仏教壮年だより

ひとりじゃないよ

TOCHIKUSO BUKKYOU SOUNENKAI RENMEI NEWS

71号 2025.8.2

発行｜東筑組 仏教壮年会連盟

どうぞ ご自由に お持ち帰りください

戦後80年を考える特別鼎談

今、あのときを振り返り、聴き継ぐ。

あの日―1945（昭和20）年8月15日から80年が経つ今年、東筑組では、10月に「平和を願う念仏者のつどい」が執り行われます。これに先立ち、戦争体験者の方の等身大のお話を聴かせていただきたいと考え、戦前から戦後にかけての時代を生き抜いてこられた東筑組内の3名の方にお集まりいただきました。戦争とは、平和とは、何なのか―仏教壮年会連盟の執行部会の面々とともに聴かせていただいた一片から、皆さまそれぞれに味わっていただければ…と鼎談の一部を抜粋してまとめました。（中面に続く）

鼎談者

- 西法寺前住職　西村 賢了 師（昭和5年生）
- 善光寺前住職　青木 晃由 師（昭和14年生）
- 妙法寺前住職　安武 真哉 師（昭和16年生）

〈鼎談日：令和7年5月20日16時～17時30分〉
※本文中敬称略

今、あのときを振り返り、聴き継ぐ。

戦争体験者ほど何も語れなかった

西村　戦時中、一度B29が永犬丸小学校の方に墜落したのが見えて、行ってみると墜落した敵機の傍らに米軍のパイロットが亡くなっていました。それを見た人が「コイツが俺の息子を殺した！」と罵り死者を冒瀆していたのを見て胸が傷みました。さまざまなことを体験して今、戦争というのは不条理で辛いことで、絶対にしてはならないという気持ちが私の根底にはあります。

安武　最近、新聞に寄せられた読者の投稿を見ると、「私の父は一切戦争のことは語りませんでした」という文言をよく見かけます。わが家でも戦争の話はほとんどしなかった。それが当たり前だと思っていたんです。実は私の父は、ガダルカナル島というところで戦死しました。周りの人たちは「名誉の戦死」と言います。でも、家族にとっては、名誉の戦死じゃない。私は、戦争を体験した人ほど何も語れないのではないかと思うんです。

父の五十回忌を機に、一度ガダルカナル島を訪れてみました。ソロモン諸島の小さな島です。「戦争って本当に何だったんだろう？」と思うばかりでした。皆さん、平和の反対は何だと思いますか？戦争ですか？でも、平和のために戦争をしたんですもんね。平和の反対は戦争じゃないんです。戦争は何のためにするのか？今、外国で起きている戦争の状況を見て、それは平和のためだと言えますか。今の日本は平和だと思うかもしれない。でも刻々と戦争に近づいていますよ。なぜならこの平和を守りたいと思うから、人間は戦争をするわけだから。戦争の恐ろしさですよね。

平和のために戦争をしてきたのは、一つに我々が〝凡夫（ぼんぶ※1）〟だからだと思うんです。戦争は、結局のところ正義と正義の戦いです。どちらも自分が正しい、間違っていないという自己中心的な考えに基づき、自分の正義のために戦っている。その姿は、私たちの日常の中にもあります。我々人間は、欲深く、怒り、腹立ち、妬む心をどうしても拭い去ることのできない無明煩悩に満ち満ちた凡夫である。けれども、そんな凡夫の私たちを何とかお浄土に生まれさせたいという大悲を、阿弥陀さまは起こされたんです。阿弥陀さまの慈悲が私たちに働いてくださり、今お念仏を申させていただく日々を味わっておるのは、亡くなったお父さんやお母さんがいつの間にやら私たちに伝えてくれたご縁。でもこの頃思うのは、多くを語らず、戦争で亡くなっていかれた方々もまた、私たちに「お念仏を申せよ、そして本当の幸せをつかみなさい」と伝えてくださっているのではないかと思うのです。

※1…「凡夫といふは、無明煩悩われらが身にみちみちて、欲もおほく、いかり、はらだち、そねみ、ねたむこころおほくひまなくして、臨終の一念にいたるまで、とどまらず、きえず、たえずと、水火二河のたとへにあらはれたり」
『一念多念証文』より

戦後80年 平和を願う念仏者のつどい

令和7年10月4日（土）
14:30受付　15:00～17:00（予定）

会場　正覚寺（八幡西区藤田2-6-29）
※公共交通機関か近隣の有料駐車場をご利用ください。

内容　開会式・追悼法要・講演・閉会式

主催　浄土真宗本願寺派福岡教区 東筑組

ご講師　認定NPO法人ロシナンテス 教育担当　川原 佳代 師

ロシナンテスとは…　医師・川原尚行が設立した国際医療NGO。アフリカのスーダンとザンビアで「医」を届ける活動をしています。巡回診療や診療所建設、給水所建設などを通して、すべての人が健やかに過ごせる世界を目指します。（内閣府NPOホームページより抜粋）

※追悼法要でのご懇志は認定NPO法人ロシナンテスに全額寄付させていただきます

毎年、8月8日の八幡大空襲の日に小伊藤山公園の慰霊塔前で行われている追悼法要。東筑組有志による勤行、焼香、法話等が勤められています。暑い最中ではありますが、どなたでもご参加いただけます。

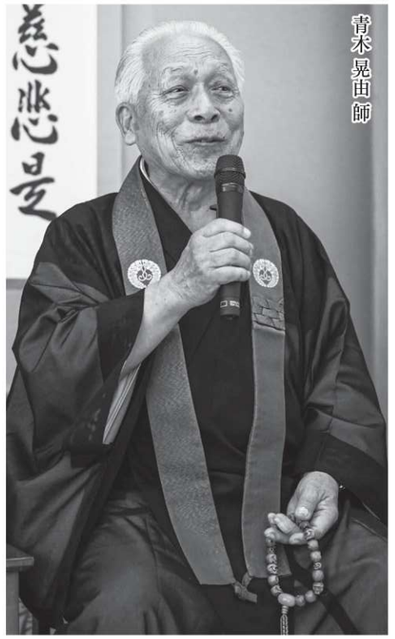
〈法要の様子〉

戦後80年を考える特別鼎談

今、あのときを振り返り、聴き継ぐ。

昭和20年8月8日、八幡大空襲の日

青木　私は当時6歳、陣山国民学校の1年生でした。当時の八幡には製鐵所で働く人々が多く、あちこちにお寺の出張所がありました。善光寺も桃園町2丁目に出張所を設けており、私ども家族はそちらで生活しておりました。8月8日はちょうど登校日でした。学校は昼からなんですが、「早く行きなさい！」と急かされて、そろそろ行こうとした10時頃に空襲警報が鳴り響いたんです。すぐに姉が私を背負って、30メートル程のところにあった防空壕に駆け込みました。私は裸足のまま。その日一日、裸足で山の方に逃げたりしながら過ごしたことを覚えています。ようやく火が収まって、母と姉と私が山から下りてきた時には、桃園周辺は何もない焼野原になっていました。家も寺もなく、門のところにあった大きな石が残っているだけ。父もそこに居て、家族みんなでしょんぼり座り込んでしまいました。


青木 晃由師

やがて焼け出された人たちが少しずつ集まり始め、炊き出しの白いおにぎりを1個ずつもらって食べました。そこで父が「身を寄せるあてのない方は、一緒にお寺に行きましょう」と町内会の人たちに声をかけ、総勢72人で永犬丸の善光寺を目指して歩きはじめたのが夕方6時くらいでした。父は町内の方数人と折尾の食糧営団に寄って食糧を調達してくるというので、私に先導を任されました。私だけでなく、ほとんどの人が裸足で着の身着のまま。今の桃園球場のバス通りを紅梅町まで来て、幸神の方に山道を上がって、鳴水、上の原、上津役を通って永犬丸に向かいます。同じ道を中間や遠賀に親戚のある人たちが、ぞろぞろ歩いてゆきました。今でも車でその道を通る度に、「ああ、この道やったな」と思います。ようやく永犬丸の寺にたどり着いて、近所のご門徒さんが大きなバケツに3、4杯お粥を炊いて持ってきてくれたのをみんなですすったのが夜の8時か9時頃だったと思います。あとは近くの川や井戸端で身体の汚れを落として、大きな蚊帳を吊った本堂で雑魚寝しました。

戦後3年程は厳しい食糧難の時代に

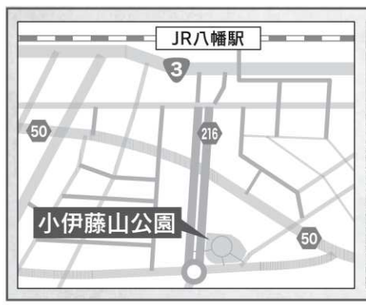
西村　私は終戦当時15歳、旧制中学校の3年生で、町上津役の寺におりました。昔から農村の集落があったところですから、実はそれほど悲惨な戦争の体験はありません。日本が真珠湾攻撃をして太平洋戦争が始まった頃は小学5、6年生の頃。軍艦マーチが鳴って「大本営発表！」と始まるラジオ放送が唯一の情報源でしたが、流れてくるのは日本軍の勝利のニュースばかりでした。真珠湾攻撃の放送もありました。特殊潜航艇という部隊があり、この攻撃で戦死した9人が「九軍神」と称されました。そのうちの一人である古野繁実少佐が、遠賀郡の虫生津の出身と聞き、私たちは小学生の足で歩いて古野少佐の生家まで行って、拝んで、歩いて帰ってくるというようなこともしました。国民学校の校門横には、「奉安殿（ほうあんでん）」という社のようなものがあり、中には天皇陛下の写真が祭られてあって、その前を通る時は必ず最敬礼をしなければなりませんでした。雪が降れば雪中行軍の訓練をする。中学1年、2年の頃には学徒動員で農繁期には農家に手伝いに行ったり、芦屋の飛行場の作業手伝いに泊まりがけで行ったりもしました。芦屋では、砂丘の山をシャベル1つで崩したり、滑走路を整備したりするんですが、これが想像以上の重労働で。「海沿いだから魚がたくさん食べられるのでは」と思いきや、野菜や漬物ばかり。汗だくで作業をした後、白飯に梅干が1個だけ入った日の丸弁当を食べようとするけど、お茶も水もなくてカラカラに渇いた喉を飯が通らないんです。腹は減っているのに食べられない。食べられなかった飯を苦渋の思いで砂に埋めて帰ったこともありました。それから、夜は敵機からの標的になるからと灯火管制が厳しく、家の光が外に漏れないように工夫していました。敵機が来れば、真っ暗な空が照空灯で照らされ、その敵機に放たれる高射機関砲の弾がトントントンと白く光って見えます。怖いというよりも、子ども心に花火みたいできれいだなと思ってしまう光景でした。戦後3年程は非常に厳しい食糧難の時代で何もかもない。ないない尽くしの生活で相当きつかったですね。

西村 賢了師

青木　終戦の日、ラジオの前に集まった大人たちは玉音放送を受けてみんな泣いていました。子どもらは、戦争に負けたと聞いても信じられず、「なんで泣いているんだろう？」くらいに思ってました。でもその日から食糧や物資の配給がピタッと回ってこなくなり、手に入れるのが困難になっていったんです。

安武　私は終戦の時に4歳で、鞍手郡宮田町におりました。周辺はほとんどが農家でしたから、食べ物はあった方だと思いますが、それでも戦時中はサツマイモや、イモの蔓、水っぽい南瓜、少ない米で作るお粥ばかりでした。戦後はそうした食べ物もなくなって、学校から帰ればどこの子も「ただいま」より先に「ひもじい」と口をついて出るほど。小学校に上がったのが昭和22年。学校に行くのは裸足で、ランドセルは馬糞紙を加工したものでした。

安武 真哉師



〈慰霊塔の碑文〉

小伊藤山公園 慰霊塔碑文

この地一帯は、丘陵地で小伊藤山と呼ばれ、その麓まで家屋が建ち並んでいた。太平洋戦争となり北から南から、また西から、防空壕が築造された。昭和二十年八月八日午前十時、米空軍による焼夷弾攻撃で、附近一帯は焼野原となり、この防空壕に避難した人々は、火煙に包まれ全員窒息死した。その数三百人といはれている。戦災復興区画整理事業により、この地を公園とし、戦災死者を追悼するため、昭和二十七年慰霊塔を建立した。〈原文より〉